平田村	地域づくりは、『人づくり』から始めよう

【平田村の概要】

平田村は、県の南部、石川郡の北東部、いわき市と郡山市のほぼ中間に位置しています。全地域が阿武隈山系の中にあり、標高500～700mのなだらかな山間地帯です。蓬田岳の麓で開催する「ジュピアランド芝桜まつり」は、14回目を迎え来場者が約１０万人でした。協議体では、地域づくりの必要性を住民と共に勉強しながら、担い手の養成など人づくりに主眼を置き話し合っています。

【基本情報】　平成２９年１月１日現在

●人口　６，４０９人

●65歳以上高齢者人口　１，７９３人

●高齢化率　２７．９％

●要介護認定率　１８．９％

●第1号保険料月額　４，８００円

協議体の設置と役割を理解するために

●背景

・平成28年5月に「任命」と言う形で協議体を設置（事務局は、行政と生活支援コーディネーター）。
・メンバーは、婦人会・老人会・一般高齢者（住民代表）、包括支援センター・保健師（保健福祉関係）、通所介護・訪問介護・訪問看護（介護サービス事業所代表）、ボランティアセンター・児童民生委員・社協（地域福祉団体）、事務局を入れて16人で構成。
・地域づくりについて、話し合いが深まった上での協議体設置ではないため、委員の第一声は「協議体って何？」「自分たちは何をすればいいの？」
担当職員もどう進めて良いかわからない…困ったなぁ。
とりあえずメンバーと住民と一緒に勉強することから始めよう。

●取組のポイント

・月に1回は、集まる機会をつくる（協議体委員会の開催）
・住民と共に勉強する機会をつくる（地域づくり講演会の開催）
・地域づくりに関心のある人、担い手になってくれそうな人を見つける（支え合い担い手養成講座の開催）
・実際に支える専門家も必要（介護職員初任者研修を県の指定を受けてはどうか）

取組の内容①

「結」や「結返し」の意識や地域の関わりを取り戻そう。地域全体で支え合おう

●事業内容

住民と共に学ぶ

『地域づくり講演会の開催』

★第1回　7月31日　「支え合い　いきいきと暮らせるむらづくり」
（講師：CLC　池田昌弘氏）

★第2回　12月18日　「もっと豊かな地域をつくるには　～今地域でできる助け合い～」（講師：さわやか財団　大山重敏氏）

※現在実施しているサロンをもっと身近な場所につくることも必要。サロンに参加できるようにするために、何かできることはあるかな。サロン参加者と交流しよう。

★第3回　3月5日　「SOSと言える地域を目指して」
（講師：福島大学　鈴木典夫教授）

取組の内容②

実際に支え合い担い手になってくれる人が、こんなにいる。平田村も捨てたもんじゃないね！！

●事業内容

担い手になってくれる人を見つける

『支え合い担い手養成講座の開催』

★第1回　2月　2日「助けてと言える地域を目指して」
（講師：福島大学　鈴木典夫教授）

※気軽に支えて欲しいと言える人間関係を作ることが大事
関西は、さみしい・話したい⇒行きますか⇒お願いします
東北は、さみしい・話したい⇒行きますか⇒**いやいや大丈夫**

★第2回　2月22日「傾聴とコミュニケーション」
（講師：針生ヶ丘病院　大森洋亮氏）

※悩むのも人間関係、解決するのも人間関係。誰にでもできる助け合いは『傾聴』。自分たちにも出来ると確認し合う。

★第3回　3月　7日「暮らしの中で『気づき』と『私にできること』」
（講師：福島市社協　佐藤　めぐみ氏）
※実際の訪問活動を具体的に知る

成果と課題

取組の成果

●地域づくり講演会や支え合い担い手養成講座への参加で、地域づくりの大切さや身近な方法を住民と一緒に学ぶことができた。
●実際に担い手になろうと言う人材が出てきた。新たな協議体委員への新メンバーが発掘できた。
●協議体委員のメンバーとして、もう一歩前に進みたいと言う意欲が湧いてきた。

今後の展望

●かなりの勢いで講演会や担い手養成講座を開催し、学びを深めてきたが、実際「地域で高齢者がどんなことに困っているのか」「どんな支援をどのような形で行うのか」、具体化した活動について深める作業をしたい。もっと話し合いたい。

↓

協議体委員に新メンバー（住民代表）を加え、活動力のパワーアップを図り、新たな事業ごとの検討する部会を作る。支え合い担い手養成講座受講者を巻き込んでいく。

〇認知症ボランティア・認知症カフェを立ち上げるグループ
〇新たなサービスを開拓する（ポイント制の導入）グループ
〇講演会・担い手養成講座を充実させるグループ
〇必要とする支援を検討する（実際に聞き取る）グループ

→ より住民目線で！

地域づくり講演会と担い手養成講座の様子

浅川町	顔の見える生活支援コーディネーター活動を目指して

【浅川町の概要】
　当町は福島県中通り地方の南部に位置し、東西8ｋｍ、南北12ｋｍ、総面積37.43ｋ㎡の小さな町で、「花火の里」でもある当町では、四季折々に花火のイベントを開催しています。

【基本情報】　（平成２８年３月３１日現在）

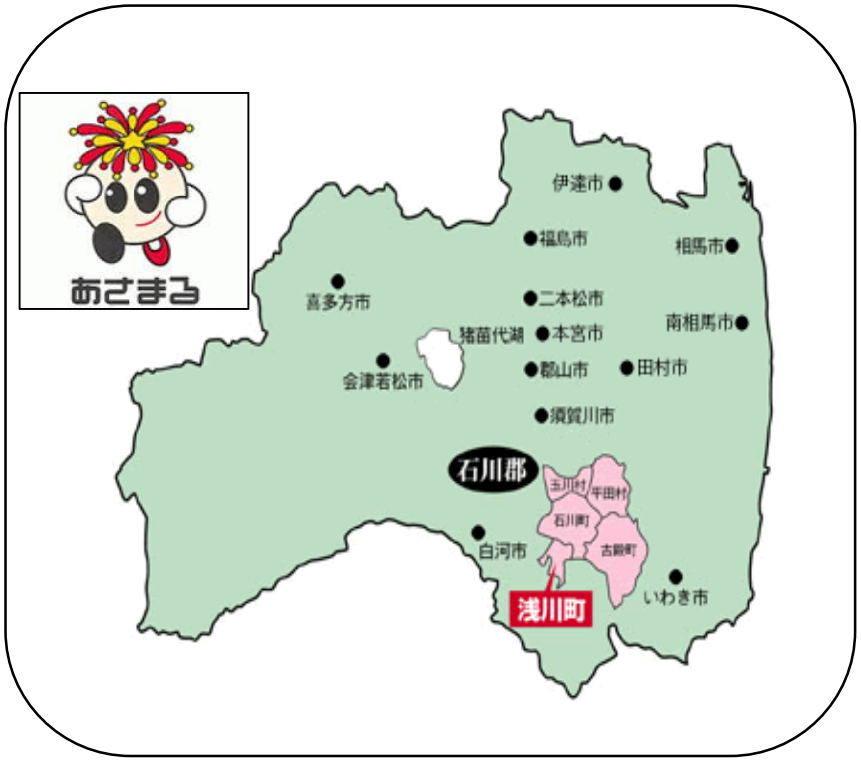
●人口
　　６，６８９人

●65歳以上高齢者人口
　　１，９７１人

●高齢化率
　　２９．５％

●要介護認定率
　　１４．５％

●第1号保険料月額
　　４，９００円



取組の内容①

経過	活　動　経　過
１か月目	●日ごろの様子が把握できていない独居高齢者世帯・高齢者世帯に、中学生とボランティアが協力して絵手紙(往復)を作成し、返信のない高齢者世帯を訪問 ●定例民生委員会に出席 民生委員と包括支援センター職員と担当地区における高齢者の実態や課題、一人暮らし高齢者世帯等の情報を共有
２か月目 ～ ４か月目	●個別訪問によるニーズや生活状況の聞き取り民生委員が心配と考えている方を優先的に訪問 ●各地区高齢者サロン活動に参加し交流(町内13か所)
５か月目	●行政の障がい担当者と『生活のしづらさに関する調査』（厚生労働省）と該当行政区を３２世帯訪問 ●60歳以上の男性を中心に『担い手』の発掘（声かけ・訪問）

取組の内容②

●訪問活動のまとめ

・個別に訪問したことで一人ひとりの生活状況や困っていることが把握できた。
・ご近所の声の掛け合いや安否確認できている。
・買い物、医療機関の受診、サロン参加の移動手段がない。
　※高齢者の運転が危険視される中、対策が必要。

成果と課題

取組の成果

●隣近所の関係が良く、安否確認を含め、声かけや助け合いができている人が多い。

今後の展望

● **『担い手』の発掘・育成が必要**
- 退職した６０歳以上の男性を中心に訪問
- 地域づくり講演会や協議体で地域の中で支え合う意識づくり

昭　和　村	生活支援コーディネーター・協議体の配置・設置

昭和村の概要

標高４００から８００mの中山間地域に１０の集落が点在し、冬期間の降雪が多く最高積雪は２メートル以上となる。

フレイル（虚弱）予防の理にかなった暮らし方を今後も継続できるよう「意味付け」や「意識化」を図りながら、過剰な支援を見直し、本人の力を奪わないよう、住民（地域支援）と関係者（個別支援）が協働による自立支援の地域づくりを推進する。

【基本情報】

●人口	１，３２３人
●65歳以上高齢者人口	７４２人
●高齢化率	56.09％
●要介護認定率	22.７８％
●第1号保険料月額	5,900円

取組の内容①

１　背景

　自分達の地域がどうなっているのか地域に出向き、既に、自然に当たり前のように、様々な活動（福祉的にみれば生活支援）があり、課題探しの前に、地域を知ることから始めてきた。それをもとに作成した昭和村介護予防手帳を通じて、介護予防（地域づくり）には様々な切り口があることを学んできた。

　だからこそ、様々な方が関わることによって、様々な切り口（新たな発想）から柔軟な支援（地域づくり）の可能性があるのではないかと考えた。委託先が一つで丸投げでは考え方が偏ってしまったり、生活支援コーディネーターが孤立化してしまうこともあるため、それを防止するために平成２８年４月より生活支援コーディネータを３名体制でスタートした。

　また、住民による支え合い活動を生活支援コーディネーターや専門職（入所施設関係者含む）も学びながら、住民・関係職種が連携する体制（地域ネットワーク）を構築することを目的に実施した。

２　事業内容

①日本福祉大学の協力のもと介護保険給付データ分析の実施

②生活支援コーディネーターの人材育成

- 学習会：2回（平成２８年１０月２４日・１２月２１日）（近隣市町村の受講を受入）
- 特定非営利活動法人　全国コミュニティライフサポートセンターに運営委託。

取組の内容②

③協議体設置に向けた準備と協議体運営の支援

平成２６年度末～村の地縁組織や関係者で学習会を継続実施
平成２７年度　　地域の支え合い活動を発掘し、介護予防手帳作成
平成２８年１０月　１日　　昭和村の高齢者の生活支援等を推進するための協議体設置要綱制定
平成２８年１０月１７日　　第１回協議体
メンバー
昭和村消防団長、小野川営農生産組合長、
放課後児童クラブ支援員、大芦婦人会、
昭和福祉会　生活相談員、
社会福祉協議会　福祉活動専門員、
昭和村保健福祉課長・係長、
生活支援コーディネーター　3名
平成２８年１１月　６日　　第２回協議体
協議体運営の支援：
特定非営利活動法人　全国コミュニティライフサポートセンターに委託

④生活支援コーディネーター定例会を毎月１回実施
（協議体を支えるもう一つの活動体）

メンバー：生活支援コーディネーター３名、保健福祉課長、係長

定例会で話し合ってきたこと

- 協議体の在り方と設置に向けて
- コーディネーターから活動・事例報告
- 生活支援コーディネーターの役割の再確認
- 専門職及び民生委員等の関係機関との関わり方
- ボランティアからの相談
- 認知症カフェの開催について
- 地域での大学生受け入れの在り方
- 住民向け地域支え合い活動講座の開催
- 子供の問題（放課後児童クラブからの相談）

成果と課題

取組の成果

協議体と聞いた時、議論する場であり、仕掛けづくりの場でもあると捉えるが、福祉教育の場、関係機関と一緒に福祉による地域づくりを体験する場、地域住民が自然にあたりまえにやってきた地域活動を意識化及び意味付けする場として大変有意義であることを、継続した話し合いにより参加者全員が認識できた。
また、協議体での話し合いから活動のヒントやアイデアが出され、実際の新しい活動への展開や既存活動の支援に結びついた事例もあった。

今後の展望

●平成２７年度作成した介護予防手帳は既に暮らしの中で実践されているが活動の評価を共用しながら。しっかり認めつつ、社会性を地域全体で意識して作っていくことを継続する。

●支え合いが本村に残っている理由、それに必要だった条件、支え合いを続けていくための条件を綴った「支え合いの記憶づくり」を整理・洗い出し地域のお宝をさらに掘り下げる。

●７０歳以上のこれから支えられる側の方々もメンバーとした協議体を開催し、日頃思っていることを話してもらい次期介護保険計画に反映させる。

楢葉町	地域コミュニティの役割・機能・価値の再確認・再発見

【楢葉町の概要】

・東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う国の避難指示が平成27年9月5日に解除されてから、約1年半が経過。現在、帰町している住民は10%程度。町では平成29年春を帰町目標に掲げ、町民が1日でも早く帰還し、楢葉町内で健康で生きがいをもち安心して暮らせるような環境を整備するよう取り組んでいる。

・楢葉町内で生活している方は、高齢者が多数を占め、地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題である。

【基本情報】

※住基人口…住民基本台帳に搭載された人口

現住人口…震災当時楢葉町に住民登録されていた者のうち週4日以上楢葉町内で生活していることを町に届け出た者及び避難指示解除後の転入者の合計

●人口
（住基人口）7,276名
（現住人口）781名

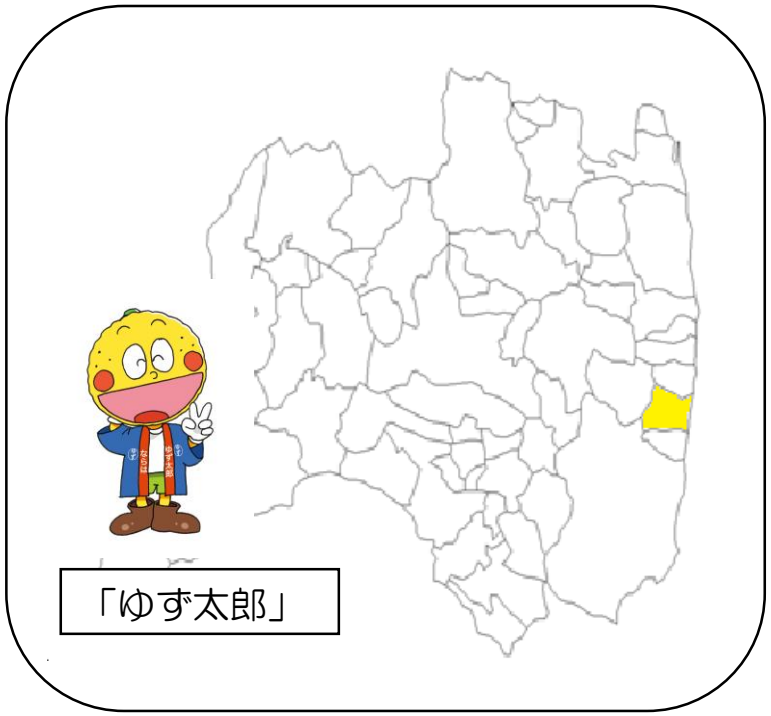
●65歳以上高齢者人口
（住基人口）2,273名
（現住人口）421名

●高齢化率
（住基人口）31.2%
（現住人口）53.9%

●要介護認定率
（住基人口）6.3%

●第1号保険料月額　7,000円

楢葉町の位置



取組①：シンポジウムの開催

●背景

・避難指示解除後の急速な高齢化に対応するため、また、新たなまちづくりを展開するため、地域包括ケアシステムの構築を、全庁（全町）的な取組に繋げる必要がある。

●事業内容

・平成29年2月5日(日)に第２回シンポジウムを実施。

　昨年度は医療・福祉の充実をテーマに開催した地域包括ケアシステム構築推進シンポジウムを継続開催。約140名の町民、専門職等が参加し、いち早く楢葉町に帰町し生活をしている住民の事例紹介やパネルディスカッションを通して、これからの楢葉町の住民同士のつながりと支えあいについて話し合った。

第２回地域包括ケアシステム構築推進シンポジウム　プログラム

●サブタイトル　「ならコレ～ならはコニュニティコレクション～」
●テーマ　「これからも、ならは。ずーっと、ならは。　いくつになっても生き生きと暮らしたい」

●内容

- 楢葉町内で活動している住民・団体の作品展示・販売
- **第1部　住民の活動事例発表 「まじわる・つながる・支え合う」**
  ：楢葉町内で生活している住民5名の生活・活動の様子をプロジェクターを使用して紹介。
  インタビュー形式の意見交換。
  【コメンテーター】 末永　カツ子 氏　（福島県立医科大学　災害公衆衛生看護学講座　教授）
  【インタビュアー】 酒井　保 氏　（ご近所福祉クリエイション　主宰　ご近所福祉クリエイター）
- **第2部　パネルディスカッション 「ともに考えよう！これからのならは」**
  ： 各パネリストの意見発表とディスカッション。

【パネリスト】	楢葉町議会　議長	青木　基　氏	「ならはの復興・再生に向けて」
	楢葉町民	坂本　房男　氏	「顔の見える関係づくり」
	生活支援コーディネーター	江尻しのぶ 氏	「住民の輝き（活力）のもと探し」
	保健師	橋本　光子 氏	「健康志向のコニュニティづくりを目指して」

【コーディネーター】　池田　昌弘　氏（全国コミュニティライフサポートセンター理事長）
【コメンテーター】　末永カツ子　氏

- **健幸づくり宣言**　１．私たちは、だれかと、どこかで、つながっていきます。
  ２．私たちは、お互いを支え、気にかけていきます。

取組②：冊子「ならは生活の達人」の作成

●背景

・避難指示解除後、楢葉町に戻って生活している住民は10%程度。地域コミュニティ再生のためには、住民同士の関心やお互いに支え合う意識が必須。

●事業内容

・冊子「ならは生活の達人」の作成
いち早く帰町している住民の楢葉町内での生活・活動をまとめた冊子を作成し、シンポジウム参加者等に配布。周囲の人々とのつながりや楽しさ・生きがいを共有することで、支えあいを生み出すきっかけとなることを企図した。

成果と課題

取組の成果

帰町している住民の生活・活動をシンポジウムや冊子で紹介することで地域包括ケアシステムの形成に欠かせない地域コニュニティ活動への関心や支えあいの意識を高めることができた。併せて、「新生ならは」への帰町意識の発揚にも寄与した。

今後の展望

町民の主体的な活動や住民同士のつながり、互いを気にかけ、支えあっていくことを通じて、すべての町民が、生き生きと元気に暮らせる楢葉町を目指す。